『イエスにならう人に』ヨハネ13:12-20

13:12 こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。
13:13 あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。
13:14 しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。
13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。
13:16 よくよくあなたがたに言っておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。
13:17 もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである。
13:18 あなたがた全部の者について、こう言っているのではない。わたしは自分が選んだ人たちを知っている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしにむかってそのかかとをあげた』とある聖書は成就されなければならない。
13:19 そのことがまだ起らない今のうちに、あなたがたに言っておく。いよいよ事が起ったとき、わたしがそれであることを、あなたがたが信じるためである。
13:20 よくよくあなたがたに言っておく。わたしがつかわす者を受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。わたしを受けいれる者は、わたしをつかわされたかたを、受けいれるのである」。

●序論
昨日、すこし機会があって御影にある「神愛子供ホーム」を訪ねました。
AG fellowshipでは、多くの宣教師たちの働きの記録が紹介され地ます。
その働きは今も引き継がれ続けていることに神の御業を見るのです。

わたしたちが小さい群れとはいえ、こうやって主の宮に集まり礼拝を捧げ続けることができるのは、そうした、主なる神に遣わされきた宣教師たちの献身があったかことを、記録が証ししています。
主によって召されて用いられていた多くの”無名”のクリスチャンたちの歩みがあるのです。

今日の結論は、実にわたしたちは、主に遣わされるものとしての一歩を踏み出そう…ということです。それこそ、「イエスさまにならう人」の歩みなのです。

●本論
Ⅰ．大切なチャレンジがある
　　13:1 …イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

そうして、まずイエスさまがそこで”してくださったこと”が、先日お読みしたイエス様自らが弟子たち一人ひとりの足を洗うということでした。
そうして後、イエス様が言われた言葉が、今日お読みしたところです。
13:12 こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。

先週を覚えていれば、その問いかけに少し疑問を持つ方もおられるでしょう。
13:7 イエスは彼に答えて言われた、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」。

先日説明したのは、その足を洗うイエスさまのなさっていることは、まさしく低く低くなり、十字架の受難を受けられたイエスさまの姿を意味しますと。この方に足を洗っていただくことはまた、イエスさまを信じてわたしたちの罪・汚れが洗い流されて、わたしたちは救われることを示します。
そのことがほんとうの意味でわかるのは、イエスさまの復活以降だとお話したのです。

そのうえでイエスさまは
13:14 しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。
13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。

それはそのまま足を洗うというこういうをまねせよ、と言っているのではなく、互いにへりくだり、お互いを愛し合うことです。
上から目線で見下ろして…というのではなく、最も低くされて…ということです。
それが、師であるイエスさまのならうべき姿だったからです。
マルコ10:45 人の子（イエス）がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

Ⅱ．大切な認識がある
それは、わたしたちは主イエス・キリストはわたしの主であるということです。
13:13 あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。

そして、とても大切なことをイエス様ははっきり述べます。
13:16 よくよくあなたがたに言っておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。
13:17 もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさ

いわいである。

「もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら」とはどういうことか。
「愛する」ということにおいて、神の御子イエスさまを超えることはできないことが”わかった上で、それを行う”、愛することを大切にするということです。

つまり自分出発の愛には限界があることを”わかる”ことが大切です。
よくわたしたちは、だれか他の人と比べて自分をはかることがあります。
わたしたちが見るべきはイエスさまであり、この方にならうことです。

その中で気づく、自分の足りなさ、弱さや欠けを知ったうえで、自分を今ここにおいてくださっているのは、神さまだと知ることです。そこから始めましょう。
神さまを頼り、聖霊さまの助けを求めて、イエスさまに応答していくとき、わたしたちは神さま由来の祝福と御業を経験することができるのです。

このとこでもう一つのことが記されています。

> 13:18 あなたがた全部の者について、こう言っているのではない。わたしは自分が選んだ人たちを知っている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしにむかってそのかかとをあげた』とある聖書は成就されなければならない。

おわかりのように、これはイエスを裏切るイスカリオテのユダのことを言っています。そして、おわかりになるように、そういうイスカリオテのユダには、イエスさまのように”愛する”ということはわからなかったということです。そしてその裏切りは進行します。

> 13:19 そのことがまだ起らない今のうちに、あなたがたに言っておく。いよいよ事が起ったとき、わたしがそれであることを、あなたがたが信じるためである。

ここにも先の言葉が響きます。

> 13:7 イエスは彼に答えて言われた、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」。

Ⅲ．受け入れることが大切です
わたしたちクリスチャンが「受け入れる」という言葉を使うとき、それはただ受け取ることや知ること以上の深い霊的な意味を持っています。

> しかし、彼（イエス）を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。（1:12）

イエス様を受け入れたときから、わたしたちは神の子として神の家族の中に入れていただく、新しい関係の中に入ります。

そこにはイエス様との”信頼”があり、イエスさまに対して”心が開かれ”、イエスさまの言葉に応答し、実践する生きざまが用意されています。

一方で、ヨハネの福音書は、イエスを受け入れいない人たちの姿も語ります。
1:11 彼（イエス）は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。
そしてこう言われます。
13:20 よくよくあなたがたに言っておく。わたしがつかわす者を受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。わたしを受けいれる者は、わたしをつかわされたかたを、受けいれるのである」。

そこにはイエスを受け入れる祝福がある。
それは父なる神様ともつながるということ。
そしてわたしたちが遣わされていくとき、そこで受けいれられるならば、それはまたイエスさまを受け入れられることになるとあるのです。

おわりに）

最初にお話した、神愛子供ホームの創設者。それは、アメリカから遣わされたバイヤス宣教師…確実にその存在は、地域に必要なものとして受け入れられいたのです。
神に遣わされてきた宣教師が、遣わされたところで、どれほど心から子どもたちを愛し、そしてもちいられてきたか、人々の目に受け入れられていたことがわかります。

振り返って、今わたしたちもこの教会で召されて、ただ集まっているだけではありません。神の言葉を聞いて、慰め励まし恵まれてとどまっている人ではなく、「遣わされて行く」存在だということを、覚えていただきたいのです。

わたしは礼拝最後の祝祷についてお話しすることがあります。
それは、終わりの祈り「終祷」ではなくて、「祝祷」なのです…と。
ここをホームとして、皆さんを主にあって遣わしていくための祝福の祈りだからです。

この歩みは、昨日今日始まったものではありません。
20:21-22 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。…

わたしたちを「遣わす」と言われる方がいる。その方がわたしたちに聖霊をくださる。
今日もまた最後に祝福を祈ります。みなさんを主にあって祝福して遣わします。
それに伴い、お互いに励まし合い、祈りましょう。そして聖霊の働きに期待しましょう。
わたしたちが遣わされているものにふさわしい、祝福の器として用いられるように、求めていきましょう。